

Title	股関節亜脱臼に関する研究
Author(s)	上野, 良三
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/28320
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名・(本籍)	上野良三 うえのりょうぞう
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 165 号
学位授与の日付	昭和36年3月23日
学位授与の要件	医学研究科外科系 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	股関節亜脱臼に関する研究
	(主査) (副査)
論文審査委員	教授 水野祥太郎 教授 武田 義章 教授 立入 弘

論文内容の要旨

目 的

先天性股関節脱臼の非観血的治療にあたって整復後なお残存する亜脱臼の対策は治療成績向上のための重要な課題である。従来亜脱臼の発生に関しては骨盤側、大腿骨側の2つの部分について別々に検討されているが股関節の発育はこの2つの部分が密接な関係を有するのでそのおのおのについて考察し、相互関係を明らかにする必要がある。亜脱臼関節の求心性の改善は寛骨臼側に侵襲を加えるよりも大腿骨側に操作を加える方が容易であり、過度の前捻および外反股を矯正することによって臼蓋発育がどのような影響をうけるかを調査する目的で小児期に前捻角および頸体角を手術的に矯正した場合の手術後の関節発育を追究した。

方法ならびに成績

先天股脱および Dysplasia 40症例71関節(男7例女33例)について整復後2年以上の早期遠隔成績と7年以上の中期遠隔成績のレントゲン像を比較した。臼蓋発育の程度を臼蓋角によって観察すると非観血的治療により改善され、とくに整復後2年までにその傾向が著明であるが、その後の5年間は改善の傾向が少い。大腿骨頸部の形態を前捻角、頸体角の面から見ると早期遠隔成績と中期遠隔成績におけるレントゲン像では大腿骨頸部の形態はほとんど変化しない。関節の求心性を示すものとして CE 角を採用すると、早期遠隔成績では亜脱臼位をとるものが42%あるが7年以上では28%に減少する。中期遠隔成績の対象とした64関節で臼蓋発育の良好なものは27%であって、その前捻角、頸体角の分布をみるとほとんどが正常範囲内にある。臼蓋発育不良の73%については過大な前捻、外反股を示すものが多い。このように良好な臼蓋発育は正常な前捻角、頸体角と密接に結びついており大腿骨頸部の発育いかにかかっている。大腿骨頸部の形態異常は正常な臼蓋発育をさまたげ、白底の肥厚のみならず、早期に関節症性変化を惹起する。中期遠隔成績で臨床症状は9%しか訴えないが、レ線像がなお異常と思われるものは85%もあり、小

児期の亜脱臼関節は機能的には大した障害を伴わないが変形性股関節症の8割が亜脱臼に続発することを考えると、大腿骨頸部の形態異常を早期に治療することは正常な関節発育とりわけ臼蓋形成をうながすのみならず変形性関節症発生の予防の面からも有意義である。

減捻内転骨切り術（3才より14才までの16人20関節）について術後2年以上経過したものの関節発育を調査するとすべての症例が大腿骨頸部の起立、すなわち外反股の再発傾向を示した。若年者ほどこの傾向がつよく3才～6才では頸体角を $100^{\circ}\sim 110^{\circ}$ に7才～14才では $110^{\circ}\sim 120^{\circ}$ に過矯正する必要がある。前捻角は 20° 以下に矯正したが再発傾向は認められない。早期に手術が行われたもの程臼蓋発育が良好であるが、10才以上の場合でもある程度の良い臼蓋発育が期待される。

総括

先天股脱の治療後にみられる亜脱臼関節の発育は臼蓋発育については放置された場合もわずかながら正常化の方向に進むが大腿骨頸部の形態は整復後2年以上でほとんど変化しない。亜脱臼位の改善は臼蓋発育と相関連するものであり、大腿骨頸部の形態が正常であれば臼蓋の良好な発育が期待されるので、先天股脱の非観血的治療の過大な前捻および外反股はできるだけ早期に手術的に矯正して骨頭の求心性を改善し、寛骨臼に対して十分な機能的、形成的刺激を与える可能性があることを強調したい。

減捻内転骨切り術は早期に手術が行われる程術後の臼蓋形成が良好であり、14才以下における内転骨切り術では再発がおこるので過矯正が必要である。

論文の審査結果の要旨

先天股脱および臼蓋形成不全の治療後にみられる亜脱臼の対策は先天股脱の治療成績向上のため重要な課題である。従来行なわれた臼蓋形成術は遠隔成績から見て必ずしも一定した成績を得られず、関節症性の変化が進行する場合が少なくない。

著者の主張する新しい手術方針、すなわち寛骨側には侵襲を加えず転子間骨切り術によって関節の求心性を改善することによって臼蓋の再発に良好な影響を与えうるということを、レントゲン像で追究したことは亜脱臼の発生論およびその治療の上に示唆するところが大きい。

骨切り術をおこなう場合、外反股および頸部前捻を、いかなる程度まで手術的に矯正するかという点に関しては、いまだ定説がなく、過矯正を主張するもの、正常範囲まで矯正するもの、あるいは部分的矯正にとどめるものがある。本研究では、20関節において行なわれた術後の関節発育を2年以上調査して各年令層によって矯正度が異なるべきことを、外反角の経年変化の面から決定した。この外反度の手術的矯正度に関する著者の寄与は、転子間骨切り術を実施する場合の重要な指標として臨床的価値が大である。